

日本建築学会優秀卒業論文賞・ 優秀修士論文賞

経過報告

本会では、1989年7月に設立された日本建築学会「建築教育振興基金（タジマ基金）」による、学生を対象にした論文の顕彰事業で、「優秀卒業論文賞」「優秀修士論文賞」を設け、優れた論文を表彰しているもので、本年はその第6回である。

本年は、大会会場で行う表彰式にあわせて受賞者本人の発表を聴きたいという要望が出された。検討の結果、時間や場所の関係上発表を行うのは困難なため、大会会場にて表彰論文を公開展示することとした。

幸い多くの方から応募があり、早速、卒業論文等顕彰事業委員会の中に選考部会（部会長：松井勇日本大学教授）を組織して選考に入った。いずれの応募論文も水準が高く選考は難航したが、同選考部会では精神的に作業を進め、短期間ではあったが厳正なる選考結果を出され、表彰論文を決定することができた。

今回選考された論文の著者に対して心からお祝い申し上げるとともに、選考部会のご努力に改めて敬意を表す。また、残念ながら選考にもれた論文も内容的には表彰論文と大差なく、いずれの論文も優秀であり、応募に際してのご努力を多とするものである。

この事業は本年度で第6回目であるが、この顕彰事業の意義はますます高い評価を得るものと確信している。

本年度の公募に際して多大なご尽力をいただいた各大学の関係者に心からお礼申し上げますとともに、今後の本事業に関しても深いご理解をいただき、さらなるご協力を賜るようお願いする。

分野別応募数（総応募数115編／41大学）

構造系卒業論文9編／4	計画系卒業論文24編／10	環境系卒業論文4編／1
構造系修士論文21編／4	計画系修士論文45編／9	環境系修士論文12編／2
構造系論文合計30編／8	計画系論文合計69編／19	環境系論文合計16編／3

※編のあとの数字は受賞数
（卒業論文等顕彰事業委員会委員長：田中淳夫）

選考報告

学生・院生を対象とする「卒業論文等顕彰事業」は「建築教育振興基金（タジマ基金）」（1989年設置）によるもので、1995年度は第6回にあたる。選考部会は、卒業論文等顕彰事業委員会の下部組織で、常置の各調査研究委員会から推薦された2名（構造、環境は3名）の委員、計24名により構成された。

第1回の選考部会は、田中淳夫卒業論文等顕彰事業委員会委員長により召集され、1994年12月22日に開催された。同委員長からこれまでの経過が報告され、本年度の選考部会長として松井が指名・承認された。まず実施要領、応募論文募集要項、選考要領について審議した。審議の結果、本年度の主な変更点を次に示す。前年度の申し送り事項のうち「表彰論文は著者自身が大会会場で口頭発表する」件について議論したが、口頭発表よりも論文を公開する方が良いとの意見が多数を占め、「表彰論文は大会会場で公開する」を実施要領ならびに応募論文募集要項に記載した。また、選考基準として「著者自身のアイデア・独創性に富んだ論文を高く評価する」件について議論した結果、選考要領は現行のままとし、ただし選考要領を応募論文募集要項に同封して各大学に送付することとした。表彰件数は、卒業論文・修士論文ともに15件以内とし、応募締切は3月31日、6月19日までに選考を終了することとした。

第2回選考部会は4月14日に開催し、これまでの経過と今後の日程について了承され、本年度の応募論文と部門別の分類の確認を行ったが、審査部門の変更はなかった。応募論文は卒業論文37編、修士論文78編の計115編で、昨年より幾分少なかったが、応募大学数は41大学で昨年とほぼ同じであった。部門別では、構造系30編、計画系69編、環境系16編であった。選考方法について再度審議し、基本的には昨年と同様な方法で行うことを確認した。選考の基本的な方法は二段階選考とし、第一次選考では部門別の選考委員全員が論文概要を精読して、評価し、最終的な選考数の約2倍の論文を選考し、第二次選考では、選ばれた論文各1編につき2名の査読委員を定めて本論文を精読し、総合評価を行い、それらの結果に基づいて表彰論文候補を選考する方法である。その後、各選考分野別の表彰候補論文数を決定し、各部門ごとにこの論文数の範囲内で選考し、他部門との振り分け、補填を行わないこととした。各部門の選考部会長（構造系翠川三郎君、計画系渡邊昭彦君、環境系中原信生君）を決定し、各部

門での具体的な選考を一任した。なお、選考は公正かつ慎重に行うことを原則とし、とくに選考委員と応募論文の著者が師弟関係などにある場合は、その論文の選考に関わらないことを確認した。

第3回選考部会は、6月19日に開催し、各部門の部会長から選考経過と選考結果が報告された。各部会の選考結果に基づき全委員の討議を経て、出席者全員的一致をもって、1995年(第6回)の表彰論文候補として当初予定していたとおり、卒業論文15編、修士論文15編を選考した。

選考終了後、各委員から選考を振り返って、次年度への申し送り事項について意見交換を行った。その結果、応募論文数は修士論文の方が卒業論文より多いにもかかわらず表彰件数は卒業論文と修士論文が同数である。この事業も第6回目となり、過去の受賞論文のリストを選考部会に提出する。論文の評価項目のうち「論文としてのできばえ」に関する評価を明確にするため論文構成、起承転結等を評価することを明記する等について意見が出された。これらの意見を取りまとめて次年度の選考部会に申し送ることとした。

(1995年卒業論文等顕彰事業委員会選考部会長：松井 勇)

◆構造系部会

今年の構造系部会が担当した論文は、卒業論文9編、修士論文21編の計30編である。一次選考では、7名の構造系委員全員がすべての論文の概要を読み、評点の上位のものより学部論文7編および修士論文10編を第一次選考論文とした。

二次選考では、各第一次候補論文に対して2名の委員をあて、本論文を精読した。卒業論文に対しては、テーマと内容、論理性と明確さ、論文としてのできばえの3点を評価項目とし、修士論文に対しては、テーマの独創性・新規性、豊かな萌芽性・将来性、研究の進め方の論理性、結論の明確さ、論文としてのできばえの5点を評価項目とした。これらの評価項目に加えて応募者自身の独創性も念頭に置いて総合評価することとした。

担当委員からの評価報告を受けたうえで、委員全員で議論を行った。この際、前述の評価項目に加えて、研究の位置づけの理解度、論文の表現力などについても議論した。特に修士論文では優れた論文が多く、慎重に審議したが、応募者の熱意が感じられる論文が評価された。最終的に、委員全員の合意により、卒業論文4編および修士論文4編を推薦することとした。(構造系部会長：翠川三郎)

◆計画系部会

今年度の計画系の応募論文は、卒業論文24編、修士論文45編の計69編で、昨年(70編)と同程度の応募論文数であったが、卒業論文が減少(昨年34編)し、修士論文がその分増加(昨年36編)している。応募大学数は41大学(昨年42大学)でほとんど変わらないことから、応募が卒業論文から修士論文へシフトしている傾向とも見えるが、提出状況が毎年変化しており、一時的傾向かは定かでない。

第一次選考は、受賞候補数(卒業論文10編、修士論文9編)の2倍程度を目安に選出することとし、選考委員はある程度専門的な精査ができるように専門別に3つのグループ(1グループ4~5名)に分かれ、論文題目等からの専門グループが精査するかを決定し、各グループとも卒業論文8編、修士論文15編の概要等を査読した。査読結果について上位の評価の論文から審議を行い、卒業論文16編、修士論

文22編を選出した。

第二次選考は選出された38編の論文をそれぞれ論文題名や概要から、専門にできるだけ近い査読委員を選ぶこととし、1論文につき2名の査読委員を選出した。査読委員はそれぞれ卒業論文2~3編、修士論文3~4編を査読した。査読結果の評価は、卒業論文はテーマと内容、論理性と明確さ、論文としてのできばえ等、修士論文に対しては、テーマの独創性・新規性、豊かな萌芽性・将来性、研究の進め方の論理性、結論の明確さ、論文としてのできばえ等から評価した。その査読評価の上位の論文から各査読委員の論文に対する意見を提示してもらい、1論文ずつ質疑を行いながら賞に相当するという意見の多い論文から受賞論文候補に決定し、意見の多少分かれるボーダーライン上の論文について集中的に審議を行い、その結果、予定通りの卒業論文10編、修士論文9編の選出を行った。

今年度の選考では、受賞候補件数に対する応募件数の倍率が、卒業論文では2.4倍、修士論文では5倍とかなり差があり、卒業論文の選考は比較的順調であったが、修士論文は力作が多い中での選考であり、審議にも時間がかかりもう1~2編追加して受賞候補にしたい論文もあったが、当初決められた受賞候補数を増やさない原則に従い、残念な結果となった論文もあった。修士論文での5倍という倍率(昨年は5.3倍)は非常に厳しく、第二次選考で選ばれる論文の多くが2名の査読委員が共に特段に優れた論文と判定し、その査読結果の説明にほぼ過半数の委員が賛成しなければならないという狭き門である。それだけにこの賞を目指した本人の努力とそれを指導された教官の熱意が伝わってくるような論文ばかりであった。

(計画系部会長：渡邊昭彦)

◆環境系部会

本年度の環境系の応募論文は、卒業論文4編、修士論文12編の計16編である。卒業論文はいずれも環境生理・心理に関するもので、本年度はエンジニアリング的なものは姿を消した。これは物理工学・エンジニアリング的なものは卒業論文のレベルで自主的にまとめることが年々困難に、あるいは評価が厳しくなっていることを示唆している。修士論文は環境生理・心理ないし環境評価に関するものと物理工学・エンジニアリングないしエネルギー利用に関するものとがほぼ半々であり、幅広いテーマに分散していた。

選考は環境系の従来の選考方式を踏襲して、第一次選考は選考委員全委員で行い、本委員会で決められた予定受賞候補数(卒業論文1編、修士論文2編)の2倍にあたる卒業論文2編、修士論文4編を論文概要をもとに指導教官の推薦書を参考として選出した。第二次選考は選考委員のほか専門委員を委嘱し、選考委員3名、専門委員6名の合計9名の委員による選考を行った。この段階では特に修士論文に関してはいずれも粒ぞろいのものであるためかなり評価が接近したが、卒業論文にあっては研究テーマの妥当性に加えて論文の量とそのできばえが評価の差を決定した。修士論文にあってはテーマの新規性、解析法の妥当性、想定される研究の自主性などにおいて評価の差を生じ、それぞれ受賞論文候補を決定し選考部会に報告することとした。結果として選ばれた論文は環境心理1件、熱解析1件、エネルギーシステム1件であった。

なお、本年度の応募数は昨年より6編減少しており、これについ

て環境系部会で意見を交換した。一部の国立大学における大学院重点化への移行の影響や、もともと環境エンジニアリング系では自主的な卒業論文をまとめるのは至難であり、自主的ならば小作、大作ならば逆に自主性の減少ということになり問題を抱えている。一方修士論文に関しては研究領域も広がり、論文の質も向上しているので、本年度の応募数減少は偶発的な事象であると考えられる。以上のような理由がそれぞれ考えられるものの、この表彰制度が建築学徒の一つの目標となり、優秀な研究者の育成に有効に作用することは明らかであるので、環境系もふるって応募されたいと希望するものである。(環境系部会長：中原信生)

推薦理由



繰返し塑性歪を受ける SM 490 A 鋼の材質劣化に関する実験的研究

正会員 大林郁良 君 (信州大学)

この論文は、SM 490 A 鋼で作成した BH-200×220×25×25 材を単純支持した梁と四点曲げ方式で載荷した実験で、激震時に鋼材に生ずる、大きな塑性歪の繰返しによる材質の劣化を検討している。その結果から、スケルトン・カーブを修正した曲線で、どの程度力学的性質が低下したかを明らかに出来ることを指摘している。

学部の卒業論文として水準を超えた構成、内容であり、特に実験計画、実験内容の記述については、著者自身の努力の跡が見えて好感が持てた。その結果が新しい知見の発見に結びついたものと考えられる。

鋼構造多層骨組の動的及び静的崩壊挙動と限界状態に関する実験的研究

正会員 田中雅子 君 (京都大学)

本論文は、著者が所属する研究室においてこれまで理論的に予測されてきた、はり降伏型鋼構造多層骨組の弓形変形モードに関する分岐現象とその発生限界を、実験によって確認・実証したもので、はり端変形部に工夫を凝らした試験体の設計から予備実験としての座屈実験・弾性固有振動実験、さらに静的繰返し載荷実験ならびに振動台実験までを卒業研究の短期間にやりとげた点や、動的応答解析結果に照らして、弓形変形の発生原因と二次固有振動数の関係に関する新しい知見を得た点など、卒業論文のレベルを大きく越えたものとして高く評価される。

構造用材料における金属系素材の適性評価

正会員 上之郷貴重 君 (名古屋工業大学)

本研究は、強度、耐候性など様々な性能を向上させた多様な金属材料が開発・実用化されている中で、金属材料の強度、補エネルギー、耐候性、溶接性、工作性およびコストについて、これらの特性値および化学成分を基にしたパラメーターを用いて、同一の指標で金属材料を評価するための総合評価式を提案したものである。既往の論文から多量のデータを収集し、総合評価するためのパラメー

ターの選定にあたっての考察が明確に述べられており、卒業論文として優れたレベルであると評価された。

宇都宮市における木造建物の地震被害区分

正会員 鈴木美和子 君 (宇都宮大学)

この論文は、地震・地盤・建物の系を統合的に扱い、特定地域における木造建築物の地震被害の予測方法を示すとともに、宇都宮市を対象として提案した方法を具体的に適用し、その結果を被害区分という形でまとめた研究である。研究テーマは社会的に要求されている時宜を得たものであり、論文自体も全体構成が十分に練られていて説得力がある。ただ、採用されている個々の要素技術に関しては、仮定も多く細かい点では疑問が残る箇所もあり、そのため最終的に提示されている被害区分図にどれほどの信頼性があるものか今後の展開に期待するところも多い。

しかし、それ以上に、このような広範な領域をよく勉強した研究への熱意と、論文全体を通じてバランス良くまとめあげた持続力とが十分に反映されたできばえになっているという点で優れた卒業論文と認められた。

室空間容積の認知構造

一実大モデルの対比較実験による考察一

正会員 田中美絵 君 (日本女子大学)

正会員 太田 華 君 (日本女子大学)

本論文は、可動の天井・壁を持った実大実験装置を用い、室の広さと容積の変化が、室空間の大きさに関する心理的印象にどのように影響するかを捉えようとしたものである。これまで吹き抜け空間の評価や実践は、個別的主観的に行われてきている面が大きいといえるが、こうした分野に客観的な裏付けを与える成果を示しており、特に集合住宅計画の今後の見直しへの活用についての論考も評価できる。論文のまとめ方がいねいであることに好感が持てる点もあわせて、卒業論文として優れたものと判断できる。

地域施設計画における施設配置の効率的最適化手法

正会員 村岡直人 君 (東京工業大学)

地域施設計画における施設の最適配置法は理論的な研究はあるものの、具体的に最適配置を求めることが困難である。この研究は、最近注目を集めつつある遺伝的アルゴリズムを具体化し最適解を効率よく安定的にえられる手法を開発し、さらにケーススタディをとおしてその有効性を実証したものである。指導教官の適切なアドバイスがあったにせよ、着眼点、理論展開、成果のいずれも著者の優れた力量を示した卒業論文である。

総合病院等に用いられる ISS に関する研究

正会員 奥津哲也 君 (広島大学)

本論文は、諸設備の革新への対応のための建築手法である ISS に

ついて、その適用例の多い総合病院を対象に研究したものである。内外の事例の文献研究と国内の適用例の実態調査に基づき、先行投資とその効用の検討、構造方式やスペースボリュームの評価などを行い、今後総合病院へISSを適用する際に参考になる資料を提示するとともに、建築全般の問題としての長期的な耐用性確保につながる示唆を示している。論文のまとまりとしてはやや荒削りな点もあるが、総合的にみて将来性豊かな優れた卒業論文と判断できる。

定期借地権制度を活用した住宅地供給に関する研究 —首都圏における活用事例の価格性向をふまえて—

正会員 池末宏行 君 (日本大学)

正会員 長谷 篤 君 (日本大学)

本論文は、平成4年に施行された新借地借家法において創設された定期借地権制度を活用した住宅地供給の可能性を、住宅供給業者に対するヒアリング、実際に供給された物件の実態調査、土地所有者の経済的側面への効果の検討を通じて明らかにしたもので、定期借地権制度を活用した住宅供給の促進を図るうえで、定期借地権を設定した土地の相続税評価法と保証金による債務控除を実勢にあったものに改善することが必要であるとの結論を提示している。

本研究は、時宜を得たテーマについて、既存の調査研究を一部に借用してはいるもののオリジナルな調査分析を主体として、オーソドックスな研究スタイルをとり、論の展開も「背景」→「実態調査」→「シミュレーション」→「結論」と、明快な論理性をもって手堅くまとめられており優れた卒業論文であると言える。

物体の方向性の研究

正会員 木下芳郎 君 (東京工業大学)

本論文はさまざまな形態をもつ物体をサンプルに用い、それぞれの物体のもつ正面性を被験者の評価にもとづいて定量的、定性的に分析した論文である。軸性、方向性、正面性という類似の空間概念の共通点や差異などの吟味が不十分という印象はあるものの、実験計画ならびにその結果の分析方法は明快であり、着眼点のユニークさと併せて、研究論文としてのまとまりと質の高さをもった卒業論文として推薦できる。

歌川広重の浮世絵風景画に描かれた「緑」に関する研究

正会員 崎元秀紀 君 (九州大学)

自然環境をとりこんだ総合的環境風景を、広重の作品の定量化を通して、研究しようという内容は、自然との共生環境を考えるうえでの今日的意義が大きいとともに、オリジナル性も高く評価される。なお、広重の絵画の誇張性を一般景観として見る限界があるが、視点場と構成要素の空間的配置の解明に手がかりを与えており、その弱点を克服するほどの論文のできればあって、卒業論文賞に値する。

移動による空間形状の知覚にテクスチャーが及ぼす影響

正会員 阿部泰浩 君 (神戸大学)

本論文は、三次元空間の知覚に関するギブソンの理論をもとに、内部空間を構成する壁表面のテクスチャーが、移動時の空間知覚に与える影響を、模倣実験で明らかにしようとしたものである。

実験では、壁面のテクスチャーが異なる6種類の迷路模型内のテレビカメラを、別室のモニターを見ながら移動させ、その軌跡を採取している。分析では、線遠近法的な知覚情報を遮断した条件下において、テクスチャーによって異なるが、静止時よりも移動時のほうが空間把握しやすい場合があるという興味深い結果を得ている。

テクスチャーの選択や実験結果の考察に不十分な点もあるが、空間知覚を新しい視点で解明しようとした試みとして評価できる。

既成市街地における3階建て化について

—建設実態と住民意識—

正会員 小沢理市郎 君 (東京都立大学)

本論文は、東京の杉並区と荒川区の全域を事例地として3階建て化の実態を明らかにし、配票調査に基づいて3階建て化の背景にある住民の住要求と住環境評価を周辺環境との関連により分析したものである。今後の都市住宅地のあり方を考えるうえで避けて通れないテーマに対して、精力的な調査を重ねて住宅地の型別の動向を整理した労作である。住宅地の型別に見た3階建てのサンプルが少ないため、仮説検証は今後の課題として残ると判断されるが、一定の成果をあげたレベルの高い卒業論文として推薦できる。

都市景観構成要素の様相に関する基礎的研究

正会員 浅井信雄 君 (大阪大学)

都市景観を客体の物理的特性のみではなく、観察主体にとっての色彩の見え方も含めて、景観要素の現れ方という現象学的な景観の見方を重視し、このような対象の現れ方を「様相」ととらえつつ、実在景観調査からその有効性を確認したものであり、景観研究に新しい視野を導入したものとして評価する。ただ、研究室の一連の研究の一環として、著者が分担している側面が見られるが、現地調査と分析は本人自らのものであり、卒業論文賞に十分値する。

総合設計制度の公開空地に関する考察

—千代田区を事例として—

正会員 細沼宗浩 君 (東京大学)

本論文の主題である「公開空地」は、都市空間にとってどのような意義や有用性等を有しているかなど、今までにも関心を集めているテーマである。本論文は、東京・千代田区に限定し、これまであまり研究対象に上がらなかった小規模の事例まで含めて網羅的に調査を行い、人々の行動、利用実態を中心に課題・問題点を明らかにしている。調査結果の客観性や形態・利用等の問題点の発生要因に対する考察に多少欠ける点はあるが、研究テーマ、論理性、研究

展開、結果の明確さおよび要点を押さえた適切な文章など卒業研究として優れたレベルにあるといえる。

視覚情報を用いた動揺環境評価に関する研究

正会員 出原良平 君 (日本大学)

正会員 伊東安治 君 (日本大学)

振動による動揺環境の評価は、異系感覚が複雑にからむのでなかなか難しいが、本研究は振動シミュレーターによる振動と、視覚情報の両面から評価しようとしたものである。精力的に実験を行い、その結果もいろいろな多変量解析の手法を用いて、多角的に分析している。しかし、データの羅列が多く、文章による考察や各分析方法の比較、今後の課題など一歩踏み込んだ記述がなかったのは残念であった。目次の構成もSD法、カテゴリー判断法など実験方法がタイトルになっているが、実験の目的や検討の内容(例えば「設計製図等の作業性に関する検討」など)を見出しに出すなど論文全体の流れがわかるよう工夫してほしかった。

信頼性設計のための要求塑性変形とその変動の定量化手法

正会員 加登美喜子 君 (神戸大学)

本研究は、崩壊機構を想定する不静定架構の終局時耐震設計において、架構の部材耐力がばらつくことにより、部材の塑性化の順序や崩壊機構が変化するために各部材に要求される塑性変形能力が変動することに着目し、その変形能力のばらつきを定量化する手法を提案したものである。本法を用いて多層剛節架構を例題として崩壊荷重係数・各層水平変位・各部材端ヒンジ回転角の変動量を求め、モンテカルロシミュレーションによってその妥当性を検証している。本研究の独創的な着眼点、論理構成の正確さ、結論の明確さは群を抜いて優れている。

鋼構造部材の座屈補剛に関する研究

正会員 下野耕一 君 (名古屋工業大学)

鋼構造部材の補剛問題では、主材の形状特性、応力状態や支持条件、初期不整に加えて、補剛材の取付位置や取付詳細など非常に多くの因子が影響するため、これまで体系的な研究がなかった。本論文は圧縮材および曲げ材に対する補剛材の位置と剛性が座屈耐力や補剛力に及ぼす影響を、各影響因子を網羅した有限要素法による数値解析によって明らかにしたもので、特に曲げ材の補剛問題における補剛材の横方向軸剛性と捩れ剛性の相関を考慮した必要剛性と補剛効率の検討が斬新で、補剛設計のための有用な知見と資料を与えた点で高く評価される。

曲げせん断を受けるRC梁の強度と変形能力に関する研究

正会員 李 楨允 君 (京都大学)

RC部材のせん断性能については、数多くの影響因子が複雑に絡み合い、理論解析が極めて困難な問題として、今なお多くの研究者

によって取り上げられている。本論文は、この難しい研究対象に真正面から取り組んだものであり、研究に対する著者の情熱が随所に感知できる優れた論文である。

本論文は、既往のせん断設計式における問題点の抽出と実際の物理現象に基づく新しい解析手法の提案、実用的な略算法の提案と実験による検証など、RC部材のせん断問題を解決するうえでの多くの有用な知見を提示したものであり、優秀修士論文賞に値する論文であると判断できる。

混合体理論に基づいた地盤の動特性に関する基礎的研究

正会員 三辻和弥 君 (東北大学)

本論文は、土粒子・水・空気からなる複雑な地盤をより正確にモデル化するために、地盤を多相混合体とみなした構成モデルを提案したものである。従来のモデルでは飽和土のみを対象としていたが、本モデルでは充填率の概念を導入することにより不飽和土まで対象とすることが可能となり、地盤応答解析の新しい展開の可能性を示している。論文の完成度には不十分な点もあるが、その独創性・萌芽性は非常に高く、今後の研究の発展が大いに期待できる優秀な修士論文となっている。

イギリス ドメスティック・リヴァイヴァル(住宅復興運動)の研究 —19世紀・20世紀建築史におけるドメスティック・リヴァイヴァルの位置づけ再考—

正会員 木下壽子 君 (芝浦工業大学)

この論文は、19世紀後半にイギリスで起こったドメスティック・リバイバル(住宅復興運動)の成立から展開の過程を、欧米諸国、アジアまで広く視野に入れて克明に描き、意味付けを行ったものであり、大きな構想力に裏打ちされた労作である。既往の研究をよく総括したうえで、明確な自分の視座をもち、現地で実際の建物を観察し、またロンドンのRIBAやシンガポールの古文書館で一次史料を調査するなど、修士論文としてははずば抜けた水準を示している。住宅プランの分析などにもの足りなさはあるが、対象に真正面から立ち向かい、エネルギーにしかも精緻に書き上げたこの論文には、ある種の感銘を受ける。

高齢者のターミナルケア施設に関する建築計画的な研究 —特別養護老人ホームにおける考察—

正会員 石井 敏 君 (東北大学)

本研究は、特別養護老人ホーム退所者の80%が死亡退所であったそのうちの半数が自施設内死亡であることを明らかにし、ホームには静養室のほか看取り室・お別れ室をうまくゾーニングして配置し、ターミナルケア施設と位置付けて計画すべきと提案している。

なかでも「看取りの場」に視点を置いたところは、独創的という以上に、手の付けにくい分野へよく踏み込んだと評価されよう。資料の集め方から分析の手順などオーソドックスでそつがない。論文全体として、非常に分かりやすく、いねいに仕上げられ、修士論文

として高い評価に値する論文である。

建築デザインにおけるオートマニズムに関する基礎的研究

正会員 中村哲志 君 (広島大学)

本研究は、デザイナーの創作における思考過程あるいは認識過程を、無意識な部分あるいは非言語的な部分も含めて、再現しうる人工知能的なシステムを開発し、建築デザインへのコンピューター利用の可能性を大きく切り開いたものである。デザイナーの認識過程あるいは創作過程に関わる諸問題を分析することにより、とりわけそのなかでの造形原理のヴォキャブラリーについての形態認識を構造的かつ緻密に分析することにより、ニューラルネットワークの学習過程になぞられた知能モデルの作成に成功している。意欲的であり挑戦的であると同時に緻密な論理に貫かれており、著者の優れた力量がうかがえる価値ある論文である。

「新幹線車窓景観」における「野立て広告」に関する研究 —「新幹線車窓景観」の保全からみた「野立て広告」への課題と提案—

正会員 松井勝紀 君 (三重大学)

ある程度の地域に限定される「車窓景観」に関する研究等はこれまでもあったと認識するが、対象(乗客)が広域に移動するという新幹線ならではの「車窓景観(野立て広告)」に着目した点は研究テーマとして独創性を感じる。わが国の新幹線全線(4線・約2000km)を対象として、すべての野立て広告の設置状況(VTR調査等)、現地調査、また広告主や自治体へのアンケート調査等を行い、きわめて多角的に「野立て広告」の実態を浮き彫りにさせている。野立て広告を景観阻害物とする前提は、心情的には理解できるが、野立て広告に対する客観的評価も一部欲しかった。しかし、調査解析の多様さおよび的確さ、今後の提案にはみるべきものが多く力作といえる研究である。

パーソナル・コンストラクトを用いた都市河川景観パタンの構成

正会員 稲田直樹 君 (東北大学)

この論文は、人々の河川景観を評価する際に影響を与える印象イメージとそのイメージ形成につながる具体的な景観構成要素との関係性を把握し、河川景観(空間)の秩序回復とその可能性を探ろうとするものである。都市内の広大なオープンスペースである河川景観を、経験や教育を通して形成される各人固有の景観の認知構造(コンストラクト・システム)という定性的視点から分析した。取り上げたのは、広瀬川(仙台)、隅田川(東京)、加茂川(京都)で、詳細な景観分析から、有用な都市河川景観パターンとして79パターンを抽出した。それは、景観の構成を説明する技法としてパターン・ランゲージの手法の可能性と将来性を示している。

研究室で継続的に展開してきた河川景観研究の一貫であるが、著者の努力を多とする優秀な修士論文である。

現代建築の言説におけるプログラム概念の普遍性と可能性

正会員 加治大輔 君 (東北大学)

本論文は、B. チュミの「ディスプレイング」論以降、建築を位置づけるキーワードとして頻出する「プログラム」概念を切り口に、現代日本建築の置かれている状況と建築家の問題意識を明らかにしようとしたものである。

分析では、70数編の論考からプログラム概念を抽出し、具体的な建築作品や提案を参照しながら、その考え方を整理し、共通テーマとしてビルディング・タイプの問題に焦点をあて、都市と公共性との関係や、方法論としての可能性について、論を展開している。

単純な自己主張に陥ることなく、説得力のある平易な文章で、現代建築のパースペクティブを提供しえている点を高く評価する。

近代解体修理の成立に関する研究

—「保存」概念と建築存在の認識をめぐる問題—

正会員 清水重敦 君 (東京大学)

建築保存の考え方が生まれた明治期の建築界の状況、木造建築に特徴的な解体修理の理念の成立、保存行政や、奈良県における古社寺保存などを論じて、「近代保存概念」の成立過程を解き明かそうとした論文である。

近年、文化財建造物の解体復元修理がとくに注目を集めているが、本研究は、そうした解体修理の概念の形成期である明治期を正面から取り上げた。未公開の資料をよく調査し、明快に分析、論述することによって、説得力のある成果を得ており、今後、豊かな広がりも予想される。よって優秀修士論文賞に値すると判断する。

長期経過した公的分譲集合住宅に於ける居住者の高齢化と住まい方に関する研究

正会員 吉田進一 君 (横浜国立大学)

本論文は、供給後20年以上経過した公団分譲住宅を対象に、居住世帯の高齢化と住まい方の変化を実態調査を踏まえて考察したものである。わが国の人口構造の高齢化が進展するとともに、住宅供給計画もこれまでの建設フロー中心のものからストックの維持・管理・更新に転換していく必要性が増大する中で、本研究で設定されたテーマはきわめて時宜を得たものであると言える。

本論文では、長期間経過した分譲集合住宅では、居住世帯の2極分解が生じていること、地域に居住し続けることを目的とした近隣住み替えや、住宅の狭小性と地域定住を両立させるための手段として複数住戸所有、親族近接居住等の多様な居住形態が選択されていること等、今後の住宅の供給計画や維持・管理・更新計画を考えるうえで有用な知見が得られている。また、調査結果の分析や論の展開は、地味ながらも堅実な方法で手堅く行われており、結果の信頼性も高い。本論文は高いレベルに達している優れた修士論文といえる。

我国戦前における近代建築保存概念の変遷に関する基礎的研究

正会員 鳥海基樹 君 (東京大学)

この論文は、既往研究がまったくない戦前における近代建築の保存をテーマとしており、独創性の高い刺激的な内容をもつ。膨大な文献史料を丹念に掘り起こし、明治から戦前において、数多くの保存への取り組みが存在した新事実を明らかにした仕事は実に新鮮で、興味深い。しかも、時代ごとの保存概念を抽出し、政治・社会的背景との関係にも目を向けながら、その歴史の変遷を分析・考察した内容は、今日の保存の状況を考えるうえでも示唆に富む。近代建築史学の確立以後を扱った終盤の記述により深みが欲しかったが、全体的に論旨は明快で説得力があり、優れた修士論文といえる。

環境との共生を考慮した半地下住居の熱性能に関する基礎的研究

正会員 古木直人 君 (東北大学)

この論文は、半地下住居の熱的性能を、モデル住宅、実験家屋ならびに従来型の実在住宅の実測結果を数値シミュレーション結果により評価し、半地下構造が室内温度条件の緩和に寄与することを明らかにしている。

モデル住宅は環境との共生を目的として古タイヤ、空き缶活用の

構造を有しており、この種の構造の熱的環境制御性が立証されれば、今後の環境共生住宅の展開に対して示唆するところも多く、実測と計算の信頼性、論文としてのできばえともに優れており、優秀修士論文賞に値するものと判定し、ここに推薦するものである。

自然エネルギー利用を含む年間サイクルエネルギーシステムに関する研究

正会員 田中英紀 君 (中部大学)

自然エネルギーや未利用エネルギーを活用した住宅用冷暖房・給湯システムの実用化が望まれているが、具体的システムの提案や性能把握は未だ十分ではない。本研究では、季節間蓄熱槽を用いて暖房・給湯に伴う冷排熱を夏期の冷熱需要に、冷房に伴う温排熱を冬期の温熱需要に充て、不足する温熱分は太陽熱で補う年間サイクルエネルギーシステムを提案し、数値シミュレーションにより戸建て住宅を対象に要素機器の容量設計、システム性能の要因分析を行い、従来システムとの比較や地域性の検討を試みている。その結果、提案システムは経済性の問題を抱えてはいるが、省エネルギーおよび環境保全性の点で有用であることを定量的に明らかにしている。

今後、実験的裏付けが待たれるが、テーマの新規性、論文の構成、研究手法の的確さ、結果の有用性、いずれも高い水準にあり、顕彰に値するものとしてここに推薦する。